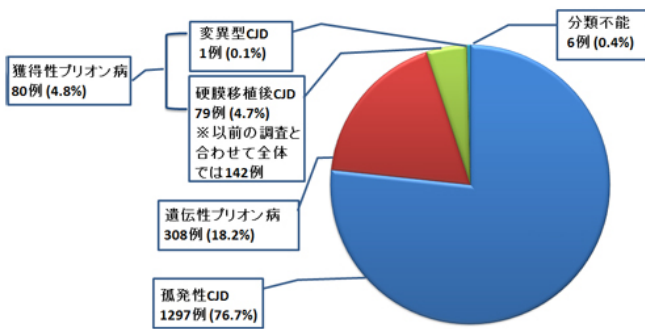


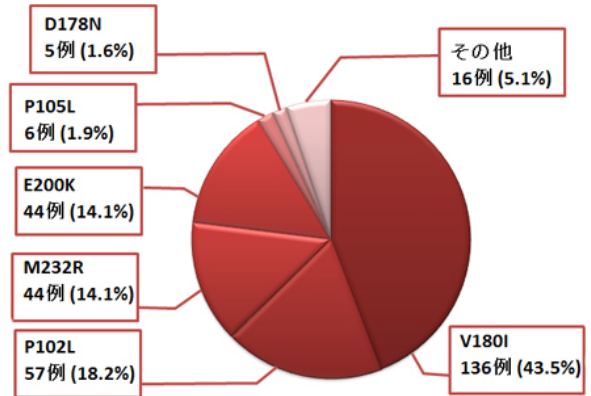
本邦におけるプリオン病のサーベイランス結果 (2011年9月まで)

研究分担者: 東京医科歯科大学大学院脳神経病態学(神経内科) 水澤英洋

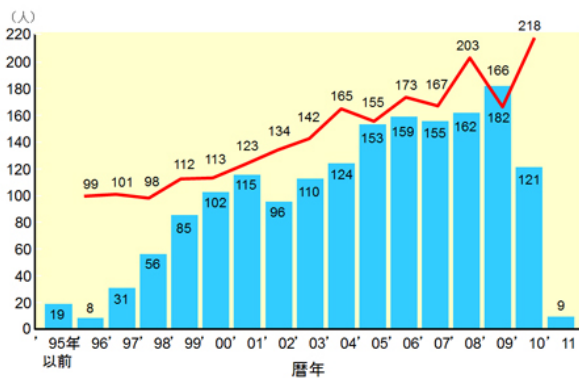
プリオン病患者1691例の内訳



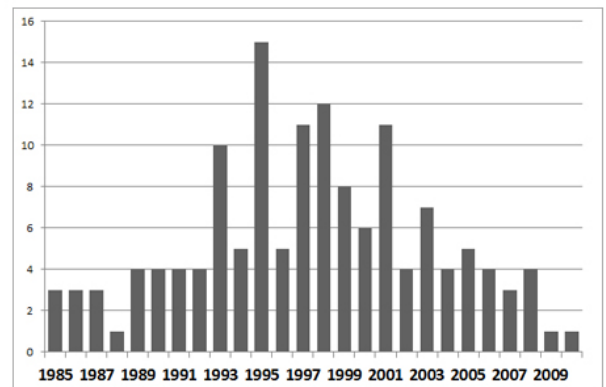
遺伝性プリオン病の遺伝子変異の種類と頻度



発病年別プリオン病患者数 (死亡者数)



硬膜移植後CJDの発症年ごとの頻度



解説

1. サーベイランス委員会は1999年4月から2011年9月までに、1,691例のプリオン病を同定した。病型および変異遺伝子ごとの頻度を図示した。新たな変異型CJDの発症はなかった。硬膜移植例は昨年から1例増えて142例となった。
2. 病型別の割合は孤発性CJDが1,297例 (76.7%)、遺伝性プリオン病が308例 (18.2%)、硬膜移植後CJDが79例 (4.7%)であった。遺伝性プリオン病の遺伝子変異ごとの頻度はV180Iが最多で43.5%、続いてP102Lが多く、M232RとE200Kが同数であった。死亡者数から推定したわが国のプリオン病の年間の発症者数は200前後と思われる、さらなるサーベイランスの充実が望まれる (2010-2011年は調査が未完了)。
3. 獲得性プリオン病の新規発症例は減少傾向にある。